
冥府より、英雄

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥府より、英雄

【Nコード】

N4187U

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

千年の齢をもつ黒竜族の若者が死んだ。

死んでも死にきれぬ若者は、甚大な竜の力を見込まれ、冥府の君とどこにいても分らない『英雄』の探索・育成を請け負うことを契約した。

復活に使う肉体のない若者は、すでに死せる邪悪なる魔術師アズール・ココの身体で再び今生に蘇りを果たす。

魔術師アズール・ココの身体は国家転覆に失敗した反逆者である。

双子のナーラカ・ココは兄の復活を単純に喜ぶが……

アズールは無事『英雄』を見つけ出せるのか？

全ての皇族、王族、貴族の中で『魔剣』を宿すものこそ英雄と、冥府の君は言うが、寄生された人間は、適合しなければ死ぬと言いだす。

契約に違反すれば、死者であるアズールの身体は腐り落ちる。

補足：昔勇の外伝です。脇役アズールの黒歴史 色々痛い目にあう 現在にいたる黒歴史部分です。悪役側の話になりますので、苦手な方は迂回推奨。

(前書き)

補足：昔勇の外伝です。脇役アズールの黒歴史 色々痛い目にあう
現在にいたる黒歴史部分です。悪役側の話になりますので、苦手
な方は迂回推奨。

薄闇の国。

暗黒の太陽が天に昇り、擦れた黒い木々が手招く。

冥府である。

荒涼とした大地に、一本の道が長く伸びている。

その先には、人面の蛇が大口を開けており、そこが冥府の深部への入り口だった。

「法と秩序が侵されようとしている」

冥府の王は言う。

「破壊と渾沌が訪れようとしている」

冥府の女王が言う。

「秩序の神々と渾沌の神々のどちらに、中立なる冥府はつくべきか」

冥府の眠る幼子が目を見開いた。

王と女王と幼子は、一つの身体に三面の頭がついた、異形の面相だった。

「今回の戦でも、秩序の神々、破壊の神々、両陣営ともに、人間の代表者に運命を競わせると」

「神々の争いはげに凄まじい。神々自身が戦えば、世界は滅びよう。人間を駒とするのは、その故である」

「神々の代理戦争を人に行わせるのだ」

「秩序の神々の選んだ英雄が勝てば、『世界の維持』、破壊の神々が選んだ呪われし者が勝てば、『滅び』が訪れるであろう」

「『滅び』の扉が開けば、全ての被創造物、全ての劣等神は『原初の渾沌』たる太母>グレート・マザー<に還るであろう」

「すでに、『滅び』の前哨である、『大地震』が何度か起こっている」

「冥府に死者が溢れている」

「冥府は秩序の側につきよう」

「賛成である」

「右に習う」

象面の夜叉テンプテンプが進み出て、日の出とともに冥府に訪れた死者を差し出した。

「黒竜族の若者です」

「竜族ならば問題あるまい」

「竜族であれば魔力は甚大である」

「監視者として、十分役目を果たせよう」

冥府の立法者がそれぞれ頷いた。

「お待ち下さい」

黒竜族の死者が項垂れた頭を上げた。象面のテンプテンプは不快げに眉間を寄せる。

「冥府の君は発言をお許しになっておらん」

「よー」

冥府の女王が片手を上げ、許した。

「何なりと申してみよ」

黒竜族の若者は女王の温情に感謝の意を示して、右手の上に左手を重ね、最上の礼を取った後、面を上げた。

「私は何故死んだのでございますか。竜の寿命は千年、私はいまだ二百年を生きておりません。気づけばこんなところに……一緒にいた姉はどうになりましたか」

苦しげに若者が煩悶して尋ねると、冥府の王は黒地に金箔を押し、死者のリストをめくった。

「竜族は白と黒の二大竜族に分かれ、黒竜族は『大地震』の調査のため、下界に二名の調査員を送った。それが汝と汝の姉である」

「はい、確かに」

「暗黒の国エレボスに近く、黒の風によって滅んだ村がある。そなたたちが死亡したのはこの村であるな？」

「間違いございません」

「享楽のエレボスでは、渾沌の神々の選んだ『呪われし者』が第二の生誕を終えた」

「『第二の生誕』？」

「『魔』としての生誕である」

冥府の王は死者の書を開いたまま、冷たい眼で黒竜族の若者を一瞥した。

「暗黒の国エレボスは魔の世界につながる『大穴』を塞ぐ蓋である。度重なる『大地震』によって、この大釜の蓋が外れかかっておる。

隙間から飛び出した魔貴族は、渾沌の神の命に従い、エレボスの皇子を破壊の神々の代理である『呪われし者』に仕立上げた。エレボスの首都では、天城自体が生きた内臓と化し、いまだ成長を続けおる」

「その『呪われし者』の生誕が一体、私の死と何の関係がありましたようや」

三面六臂の内、女王が巨大な目玉で若者を見下ろした。

「そなたの姉は不自然な壊滅を遂げた村の調査のために、冥界の使者を呼び出しましたね？」

「はい」

「『呪われし者』の生誕にとり、魔の世界から現世へと、激震が走りました。不安定な状態にあつたそなたたちの『場』は、この時振れ、そなたたちごと」

ぱちん、と弾けて。

女王の甘い吐息が冷気に拡散した。

「そなたには酷な話でしたね」

黒竜族の若者は、青ざめたものの、礼を取ったまま気丈に女王を仰いだ。

「冥府の御方、我が姉はどうなりましたか」

「姉君は魂ごと霧散しました。我らなら、姉君の魂の再生、可能ですか」

「交換条件というわけですね」

「物分りのよいこと」

くつく、と女王は扇を煽いでみせた。その時、眠る幼子が眼を上げた。

「秩序のために、直ちに現世に降り立ち、『呪われし者』に対抗する『英雄』を探索せよ」

「しかし、私には太陽の光に耐える身体がございません……」

「案じゆるな。僕がお前のために身体を用意しよう。邪悪なる絢爛の魔術師、青蓮華の二つ名を持つ、『アズール・ココ』」

にたあ、と冥府の幼子は薄笑いを浮かべた。

「アズール・ココは古王国トリエステの筆頭魔術師でありながら、国家転覆の謀をもうけ、自ら王位につかんとした大逆の徒である。天意なく、主君に討たれて死亡したが、その身体は信者も同然な弟子たちに保管され、現在架空庭園に眠っておりゆ。それを使い」

「わ、私に人間になれと……」

黒竜族の誇り高い若者は愕然と目を見開いた。千年の齢を誇る竜族にとって、人間は虫けら同然の存在だ。その人間に身をやつせとは……

若者の逡巡にいらだったのか、幼子はかつと目を見開いた。

「神々の戦では、人間が主駒となる！ これは代理戦争である！

『原初の渾沌』が訪れれば、そなたたち竜族の千年の齢も何の意味があるう。お前は監視者として、また探索者として、『英雄』を見つけ、最後の戦いに備え、育て上げるのだ！」

「どのようにして、地のあるところ有象無象に溢れた人の中から『英雄』となる者を見つけたせましようか」

「『魔剣』に判定させよ。『魔剣』の種をやるう。これは人に寄生し、人の精気を吸って育つ。『英雄』となる資質がなければ、ただちに寄生された人間は滅びよう。古き英雄の血を引く皇族、王族、名だたる貴族の者に寄生させるがよい」

「人が死にまする」

「『滅び』が来れば皆死ぬる。他に方法はない」

黒竜族の若者は確かに頷いた。

冥府より、英雄

目が覚めた時、身体中の節々が痛んだ。手を握って、開いて、呼吸をして、呼吸を　　！！！！

「ッは！」

跳ね上がって息苦しさにげほげほと激しく咳き込むと、額を何か透明な板にぶつけた。

硝子の棺か。

両手で蓋を押し開ける。上半身が起き上がると、ぱらぱらと何か剥がれ落ちた。白薔薇である。

「何と、悪趣味な」

眉根を潜め、自分の新しい器を確かめた。白い。肌が薄く、異様に白い。何ということだ。黒竜族の磨き抜かれたあの漆黒の色はどこに失せてしまったというのか。頭髮に触れば、全く色素の薄い白金で、これはせめて生前に近いと嘆息した。

白い経帷子を着せられ、いかにも死者の装いだったが、邪悪な魔術師アズール・ココは身体を折り曲げた。

「……ふふ」

間違いなく、気道を通って空気が漏れる。

「ふふ……くつくつく……あ　　っはははははっつっ！！！！！！！！」

振り返ってアズールは哄笑というより、むしろ爆笑した。

「蘇ったぞ、俺はああああああああ！！！！！！」

復活だ！

花びらをすくって放り投げた。

琥珀色の眼に、滴るような憎悪と狂気が濡れ濡れと輝いていた。

薄い皮膚の下を何か凶暴な衝動が荒れるっており、今にも肌を食い破って黒い憎しみが溢れ出しそうだった。

アズールは白い面を手の平で覆った。色素の抜けた金髪が額に落ちて来る。

「そうか、これは『アズール・ココ』の憎悪か……」

いいだろう。

叶えてやろう。

まずは、お前を殺した古王国トリエステを壊滅させてやろう。それが、俺からお前への代価、いいや、はなむけだ。

アズールは周囲を見回した。

架空庭園、という場所のようだが、確かに辺り一面花だらけだ。白薔薇がうねうねと繁殖力も旺盛に咲誇っている。

すると、突然白薔薇の間に黒い亀裂が走った。違う、扉が開いたのだ。

黒い服の女が瞠目して立ち竦んでいた。死体の世話係か？ アズール・ココの信者も同然という弟子の一人だろうか。

「アズール兄さん！」

何と、妹のようだ。

確かに、同じ白金の髪 自分もあのような面立ちをしているのだろうか。人間の造作など興味はないが、醜悪ではないように思う。ふと気づいた。記憶がない。

アズール・ココの生々しい憎悪は細胞の隅々まで覚えているものの、生前の記憶はほとんどないに等しい。一度死んだということ、その辺は勘弁してもらおうことにしよう。

「ああ、兄さん！ やっぱり、蘇ったんだね！？ 僕は信じていたんだ、兄さんが必ず蘇るだろうって約束してくれたから、ちゃんと遺体を保管して、ずっとずっと待っていたんだよ！」

硝子の棺の元に駆け寄るなり、涙ながらにアズールの妹は兄の白い手指を握り締め、切々と訴えた。

「お前は……」

「あ、ごめんね。復活したばかりで、混乱しているよね。僕は双子のナーラカ・ココだよ。覚えていないの？」

「すまないが、ほとんど記憶が欠落しているようだ」

「そうなの？ いいよ、徐々に思い出してくれればそれでいい。でも、兄さんが蘇ったのなら、やることはもうたった一つだよ」

「ああ。トリエステを」
「皆殺しさ」

鏡写しに相似な双子は意を通わせ、にっこりと笑った。

「それだけは覚えていたんだね、兄さん」

「ああ、それだけは血反吐が出そうに覚えている」

うつすら笑ったアズールに、双子の妹ナーラカは目尻の涙を指の腹で拭った。

「さすが兄さんだ。昔っから粘着質なんだから」

「誉めているのか、それは……とアズールの胸中に複雑な思いが過ぎるが、」

「僕、本当は何度かトリエステの連中を虐殺してやろうかと思いつめたんだけど、兄さんが必ず蘇りを果たすって末期に約束してくれたから、我慢していたんだ。これで、思う存分奴等を血祭りに上げられるよ」

「召還獣を呼ぶでしょう。劣等竜を大量に呼び出して、空から攻めるでしょう」

「それもいいね。僕も兄さんが死んでから二十年間、魔術の研鑽を

つんだんだ。もう二十年前のように、兄さんを殺させたりはしない。頼りにしてね」

アズールはこいつは本当に信用できるのか、と疑心を隠しながら尋ねる。

「……俺は何故死んだんだ？俺たちは古王国に比類なき甚大な魔力を持った最高峰の魔術師だった筈なのに」

「僕たちは、魔術が使えなければただの非力な人間だよ。兄さんが魔術を使う前に、えりすぐりの国王直属部隊が手に手に武器をもって、用意周到に罠をはって。兄さんはあつという間に暗殺されたんだ。よく覚えていなんだね」

いや、とアズールは頭をふった。覚えて、いる。身体が血の記憶を持っていて。何度も何度も穴を空けられた。邪悪な魔術師だからといって、二度と蘇らぬように串刺しにされた。

上半身をなでまわして、どこにも穴が空いていないことを確かめる。

「俺は穴だらけにされた筈だ」

「架空庭園の主に頼んで、僕も共同で一緒に修復して貰ったんだ。架空庭園は商品の名がつくものなら、奴隷から臓器まで何でも扱う闇の貿易商だからね」

「そうか……苦勞をかけたようだな。すまない」

「ううん、いいんだよ。それより、ナイトメアも心配しているよ。早く彼にも会わせてやらなきゃ」

「ナイトメア？」

「兄さんの片腕だよ。獣人の黒騎士で、黒の体毛に金の目の」

忘れてしまったんだよね、とナーラカは呟いた。

「いや、また一からやり直そう。僕らの夢のために」

兄さん、僕らの幼い頃からの夢は、『世界征服』だったんだよ、とナーラカは二十年経っても容色の衰えぬ眩しい笑顔で言った。

世界を征服してなんとする。

それは勘弁して欲しい、と新生アズールは内心額を押さえていた。

綿密に準備した大掛かりな召還魔術の前には、古王国トリエステの守りなど、紙を破り捨てるに等しい薄っぺらな防御に過ぎなかった。

数回に渡る大地震によって国力が疲弊していたこともあっただろう。

何より、アズール・ココは元黒竜族の恐るべき魔力を保持していた。召還される魔物は底をつきなかった。また、ナーラカの召還したイフリートやシャイターンといったジン族上級魔はよく炎に通じ、全ての障害を焼き払った。爆風とともに、双子のナーラカのスカートが激しくはためいた。

「兄さん、凄いや！ これなら世界征服も夢じゃないよ！」

「いや、それはどうか……」

劣等竜の背に腕組みをして立ち、赤々と燃えるトリエステ城を見

遣りながらアズールは言う。側には、ナイトメアなる獣人の護衛が
ぴったりと張りついている。半身半獣とはよく言ったものだ。美し
い黒豹が人の形を取ったなら、このようになったに相違あるまい、
という想像を具現した青年だった。

「貴様あああああああああああああああああ！」

トリエステ騎士団が必死の形相で向かって来るのを、劣等竜が炎
のブレスで右から左に焼き払う。

「いい子だ」

アズールは誉めて、その背を降りた。

「アズール」

無口な獣人が、僅かに不安をにじませてた口調で咎める。何しろ、
アズールには一人の折、討ち取られた前科がある。

「陛下は俺自身の手で討ち取って差し上げなければ」

笑うと、ナーラカが大喜びした。よほど怨み骨髄のようすだ。

アズールは優秀な護衛と召還獣に護られて、悠々と王の間へ向か
った。取りすがってくる騎士たちを、まるで紙切れ同然に斬り捨て
るのはナイトメア。業火の焰で焼き払うのはナーラカ。召還獣たち
は人形の首でも啜えるようにじゃれついて、簡単に四肢を千切れさ
せた。

悪夢がトリエステの王宮を大手を振って行進していた。

王の間にたどり着く。

重厚な大扉を両手で押し開いた。

たちまち矢が雨となって降り注いだ。鏡面の盾がそれを防ぎ、小爆発が起こると同時に中の人間は半数以上黒焦げになって死んだ。生き残った者たちは恐怖に目を見開き、主君を護るよう円陣を組んだが、「よい」と低い声が遮った。

「皆、下がれ」

「陛下！」

「下がれと申したのだ！」

一喝されて、騎士たちは僅かに円陣を解いた。

「余は前に出る！ 下がれ！」

ざつと軍靴の音がして、両開きのカーテンを開くように騎士たちの鎧の合間からトリエステ王が姿を現した。

「アズール・ココ。断末魔に残した呪いの言葉通り、再び今生に蘇ったか」

「陛下、お久しぶりでございます」

アズールは微笑を携え、優雅に一礼してみせた。卑しくも宮廷魔術師の最高礼であった。

黒の詰め襟に鎖骨が覗く三角形に空いた胸元、ボディスに張り付く白い胴衣に、右腕には燻し銀に輝く籠手>ガントレット<を装着して斜めに渡した拘束具で固定している。太股まで来る拘束長靴、まるでトリエステの騎士の正装、その悪趣味な模倣である。

腰周りはせめて魔術師らしくすねの半ばまでは来る裳をはいている。

アズールなりに、魔術で破れた自省に、騎士のいでたちを織り交

ぜ、武をもって相対しようという決意の現れでもあり、騎士道を重んじるトリエステ及び元主君へのあてつけでもあった。

この時代、魔術と剣術の混同など、ほとんど酔狂を通り越して愚弄の域に達している。

そして腰に吊り下げたのは細身の双剣。実はこれは最大級の侮辱であった。

トリエステ国王その人が、名匠の鍛えた双刀の三日月刀>シミタ―<を操る剣豪であり、かの剣技は国外三十邦に知れ渡っている。

その悪辣で粗雑極まりない模倣は、完全な嘲弄目的しかありえず、国王はまさにそれを嗅ぎ取って侮蔑の眼差しを向けた。

しかし、それすらもいまのアスールには、メインの前の美酒でしかありえぬ。

「国家大逆の罪を犯した上陛下にむざと討ち取られて、二度と御前に顔を出せたものではないと恥ながらあ」

ゆっくりとお辞儀して顔を上げ、浮かぶその笑みは邪悪。

「はやる復讐心を抑えきれずに、おめおめ冥府から這い上がって参りましたあ」

げらげらと笑い出さんばかりの嘲りに、トリエステ王は己が外套を打ち払った。

「邪悪なる背徳者め！」

その目には憎しみではなく、侮蔑の炎が燃え、一瞬悔恨の色すら過ぎった。

「二十年前、まだ余が若かったあの頃。そなたの亡骸に取り縋

って慟哭する身内に憐れを催し、遺体を下げ渡したのがそもそも間違いであった」

アズールは一瞬眉根を寄せた。

「余は最高峰の魔術師である貴様とともに学んだ思い出、貴様自身の栄えある功績を鑑み、泣き絶える身内へ温情をかけることを己に許した。しかし、徹底的に貴様を冥府の深奥まで廃棄しなければならなかったのだ」

払った外套のもと、腰の宝刀に手をかけたトリエステ国王の目に激しい火花が散った。

「貴様の身体を穴だらけにするだけでは厭き足らず、切り刻んで灰燼と帰し、聖水で清めた後に川へと流してしまうべきであったわ！」

黙って聞き続けるほど、アズールもおひとよしではない。

「おふざけも大概にしろ、暗愚で無知蒙昧なるクソ国王よ。貴様の代で三百年の栄華を極めたトリエステも終焉だ！ 貴様が俺を殺したからだ」

笑いながら、アズールは絶えいんばかりに両手を捧げるよう開いた。

「貴様はトリエステ王朝の終幕を引いた愚王として歴史に汚点を残すだろう！ ははは、羨ましいぞ、この匹夫めが！ 民に愚昧なる王として永遠に語り継がれる名誉を与えてやるうというのだからなあ！ 泣いて地べたに這いつくばり、俺の爪先にその汚い唇で口づけ、許しを請うがいい！ せめて一思いに殺してくれるわ！」

さあん、とトリエステ国王は宝刀を抜いた。

「長口上もそこまでにしておけ、腐敗した魔術師よ。背徳者アズール・ココ、我が宝刀を頭蓋に受けてみよ！」

「長口上はどちらだあッ」

アズールは双剣を抜き払った。

稲妻のような素早さで二人は間隙を走り抜け、鉄の摩擦に火の粉を散らした。

「兄さんっ」

「ナーラカ、手を出すな、雑魚を殺せっ」

「無駄口を叩いておる場合かあああああああああああああああああああああ！」

若年で王位を継承し、勇猛無双で鳴らしたトリエステ国王は十字に交差させた三日月刀を跳ね上げた。

「ちいっ」

元より剣技でアズールがトリエステ王に敵うはずもなく、勢い一歩踏み出し、身体を反転させて冷静に宝刀を突き出した国王に、アズールは笑ったまま腹を貫かれた。

「討ち取ったり」

もう一突きした瞬間、からん、とアズールの籠手は剣を落とした。

「わあああああああああああああああああああああああああああああ！」

ナーラカの絶叫が虚空を切り裂いたが、アズールは口から血を溢れさせながら、そっと右手を上げた。

「乾氷球」

右手の平がトリエステ国王の顔面に優しく触れた瞬間、激しい蒸気が立ち昇った。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
！！！！！！」

おぞましい悲鳴が遅れて王の広間に響き渡り、反響し続けた。絶対零度以下の冷熱で顔面を焼かれたのである。

「愚王陛下！ わたくしは死人でございますよ。お忘れかあ！」

哄笑も高らかに、アズールは懐から硝子の破片にも似た『魔剣の種』を取り出した。生き残った兵士たちが口々に国王の名を呼び、ときの声を上げて得物を抜き放ちながら駆け寄って来るが、無言のナイトメアが円舞を披露するように次々と血飛沫に帰した。

「兄さん、兄さん、大丈夫なの！？」

泣き濡れて顔面をぐしゃぐしゃにしたナーラカが駆けつけた。

「うわあつ またおなかに穴が開いているようつ 吐血しているし
！ 畜生、よくもやりやがったなこの馬鹿王があつ」

膝をついてうめいているトリエステ王に爆炎を浴びせようとした

ナーラカに、その手を抑えて、「待て」と制止する。

「兄さんっ」

「よい。今は引け。さて、トリエステ王よ。機会をやるう。生くるか死ぬか、貴様の身体に流れる古い血と貴様自身の胆力にかかっている。『魔剣』よ、お前に冥府との盟約に従い、古き英雄の血族に連なる供物を捧げよう」

ぱつくりと裂けた赤い肉に、無造作にアズールは種子を埋め込む。トリエステ国王に訪れた激変は凄まじかった。

「ぐあああああああああああ」

埋め込まれた種子から、複雑怪奇な紋様を描く帯が身体中網の目に走る。

交戦していた騎士たちは驚愕に目を見開いて止まった。

海老反りになり、次には身体を折り曲げるトリエステ国王は、顔面をどす黒くするまで血を昇らせ、筋肉が膨張して、どこもかしこも紋様に覆われながら、あっという間に身体中の筋肉が断裂した。ぺたん、と座り込んだ勇ましきトリエステ王は真っ白に萎んでいた。

まるで水風船が弾けたかのようだった。

「やれやれ、何十代も続いた名家を誇りながら、大した血脈ではなかったご様子だ」

「何なんだよ、兄さん」

「『魔剣』の種子を埋め込んだのさ。適合率何と全世界の人間分の一。まあ、常套だな。他にも王族がいるはずだ。魔の者どもよ、血脈に連なるものは全て引きずり出せ！」

常人には耐えられない咆哮が主に応えた。

残る騎士たちは自失呆然とし、王妃、王女二人が王の間に引きずり出されてくる間に全滅した。

「アズール・ココ！ おのれ、陛下に何をしたのです！」

黒髪の王妃は髪を振り乱してもなお気高く、娘たちを庇いながら咽を嚔らして詰問した。

「おお、王妃殿下。二十年も経つのに、相変わらず美しい。お二人のお子をもうけられたのですね。私が宮廷筆頭魔術師顧問を勤めさせて頂いたおりに、まだその仮腹には影も形もなかったものを！ 貴女に怨みはありませんが、これも運命と諦めて、『魔剣』に御身を捧げて下さいまし」

「何を申すか、下郎！」

「はは、解語の花が罵倒をなさるとは。何、貴女さまも愚昧陛下のお側に送って差し上げます。もちろん、王女殿下たちも！ ご安心召されよ！」

はっと王妃は口を噤んだ。

白い空蟬の抜け殻のような物体が、何なのか聡い彼女は気がついたのである。陛下、と彼女は深紅の唇を呆けさせた。

「ああ、神よ！」

悲痛なうめきには、血を吐くような祈りが塗り込められていた。

「そつお嘆きになるな。何しろこの虐殺は」

神々のおすみつきなのです。

慈愛すら漂わせた薄笑いを浮かべ、アズールはきつちり三人分の種子を砕いた。大本となる心の臓から削り取っているのである。

王妃が幽鬼のような蒼白の面を振りかぶった。

「穢れた魔術師！」

王妃の鋭い叫びが虚空を引き裂く。彼女はのろいの言葉を吐き散らした。

「お前など地獄に落ちるがいい！ 永久なる火の劫罰を受けよ！ 陛下のような善良なる魂と違い、お前は大蛇の顎で噛み砕かれた後、蛆にたかられ、硫黄の火で骨の髄まで焼かれあぶられるだろう！ 神を冒瀆する邪見な魔術に耽り、与えられた天物に満足せず、貪欲に全てを求めんとした不敬者にして傲慢者！ お前は自ずから異端であり、犠牲者に暴力をふるい、殺生を犯し、欺瞞と虚言と偽善に満ち満ちて策を労した。しかしその最大の罪状は！！ 大恩あるかつての友でもあり主でもあった陛下への裏切りじゃ！ 祖国への叛逆を一切罪と思わぬ心！！ 禁術に習い、衆を惑わし、法を破り、恩人を害し、全てを貪らんとする戒律破りの者よ、お前には永遠の劫火が待っている！ お前の前には救済など一切ないだろう！ 大焦熱に落ちよ！」

見事に途切れぬ口上を律儀に聞いてやったアズールは、しかし、

「王妃とあろうお方が口汚い」

役者のように大げさに肩を竦めた。

「最後に素晴らしい演説をどうも。あいにく私は冥府の飼いだです。て。さあ、おままごとはもうおしまいです」

慈悲のかけらもなく、種子を埋め込むや、王妃は一秒もたずに破裂した。

「お母さまあ！」

上の姫が妹姫の目を塞ぐようにして悲鳴を上げた。

「おやおや、残念。血が薄かったようですなあ」

ということとは、陛下はあれでもかなり優秀だったということかとひとりごちる。

「さて、では、お二人の結晶である姫殿下方にも」

アズールが種子を取り出した時、

「ま、ま、待てえっ」

大扉の向こうから、一人の少年兵が間抜けな声とともに飛び出した。

「何だ、こいつは」

外の召還獣たちはどうしたのだろう。あまりにも短身瘦躯で見過ぎしたか？ ありえる。

「クロン殿下から手を放せえっ」

た。

「お逃げなさい、トリス！ そなたの恥ではありません！ この悪魔には敵わぬ！ 逃げて世の人に伝えよ！ 我が国の惨劇を伝えるのです！」

「で、出来ません、殿下あつ」

半泣きになってトリス兵は訴えた。

「お、おれ、俺は一兵卒ですが、殿下をお見捨て出来ませんっ」

「馬鹿者……」

王女は両手を高く獣に掲げられ拘束されながら、涙にくれた。

ぱちぱちぱちぱちぱち、と乾いた音が響き渡った。アズールが拍手していた。

「おうおう、泣かせるではないか。孤高の姫君と、その姫を救い出さんとする騎士見習もどきの物語。この世に溢れ過ぎたお題目で誰も耳を貸さんぞ。まあ実際目にしたのは初めてだが、なかなか陳腐で笑える光景だ」

「く、愚弄するか……」

悔し涙でクロン王女は真っ直ぐな黒髪の下睛を光らせた。

「どうでもいいが、話を元に戻すぞ。そこのガキどもは馬鹿父母の遺伝からいって、恐らく『魔剣』を宿すことは出来ないだろう。もちろん、万が一ということもあるから、慎重な俺は一応姫君方に貴重な『魔剣』の種子を植え付けるつもりでいる。適合しないと、その白い物体のように、破裂して死ぬがね」

「そ、そ、そんなことは、させないっ」

「だから、相談だ。お前、本当の忠義を俺に見せておくれでないか？ お前が二人の王女に代わって、自らこの種子を身体に植え付けるといふのなら、お二人は見逃してやってもいい」
「な！」

息を飲んだのは、クロン王女、トリス少年兵、双子のナーラカ全
く同時である。

「に、兄さん、何酔狂なこと言ってるんだよ！」
「いいだろう。どうせこの王女らは役に立たん。それに、全く王家の血統に関係のない連中に植え付けた場合のデータが気になるからな」

「うわあ、鬼だよ。僕、子供相手に虐待は嫌いだ。そこの下のお姫さまと、この男の子は逃がしてあげようよ」

「お前、相変わらず子供には甘いな」

言って、アズールは口許を抑えた。今、するりと出た台詞に、どつと冷や汗が噴出す。

己が何者かといえば、彼自身は人間のつもりなどないのだ。自我のせめぎあいなど、そもそも認めぬどころか、想定すらしていない。それなのに。

アズール・ココの記憶が浮上したのか？

「嬉しいなあ、兄さん、結構思い出して来たんじゃない？」

「ああ……」

上の空で応えて、「」どうする？」と促した。

「お止めなさい！ もう、よい！ 構わぬ！」

クロン王女は慟哭して首を振った。

「青蓮華の魔術師よ！ その同じお顔をした双子の赤蓮華さまの温情に縋りたい！ 我が妹ファティマとスライマーン騎士団見習トリ・タロットの命乞いをしたい！ 私はどうなっても構わぬ！ あなたに一欠片でも人の心、身内を思う慈悲があるなら、それを今我らに賜うてくりやれ！」

「散々な言われようだな……」

アズールは天井を仰いだ。

俺が悪者のようではないか。

いや、悪者なのだが、これでも世界存続の大義のために現在働いているのに

ううむ、と唸ったアズールに、トリス少年兵が歯の根が合わないまま、どうにか剣に取り縋って口を開いた。

「お、俺、やります。俺に、その『魔剣』の種子を植え付け、ろ！」

言った途端、どつと少年の青ざめた頬に涙が溢れた。王女が咽を引きつらせて聴こえない悲鳴を放った。

「……止めると申すに！ トリス、止めよっ」

「お、俺、孤児にも関わらず、陛下にも、殿下にも、よく、して、頂きました！ 大恩に、今、報い、ますっ」

「止めよおおおおっ」

そなたは、そなたは、本当は、

王女の言葉は声にならなかった。
ただ青い瞳に熱い雫が溢れてならないようだ。

「あー、本人もこう言っていることだし」

今更引つ込みのつかなかったアズールは、「兄さんっ」と責めるナーラカの視線を無視して、トリスの元に赴いた。

「あー、君の勇氣ある行動に心から賞賛を贈る」

「変態魔術師めっ 貴様の賞賛など、俺の短い人生の終末に要らんっ」

涙目になって罵倒され、アズールは危うく種子を落としかけた。

「で、殿下、お、俺っ 恐れ多くも殿下のことをお慕」

「言っなっ」

頭を振るクロン王女に、止まらず滂沱の涙がトリスの頬を濡らした。

俺の目の前で若い恋の典型的展開は止めてくれ。

アズールは先ほどから背中にナーラカの敵意をひしひしと感ず、やはり気が進まぬ、止めよう、と種子を握りなおそうとした。ところが、

「ッあ！」

思わず悲鳴があがる。種子が突然熱を持ち、アズールの指の隙間から零れ落ちて、トリスの額に張り付いたのだ。

「馬鹿なっ」

まるで種子が意思を持って食いついた、と言った方がよいかのよ
うな突然の反乱だった。

アズールの意に反して、『魔剣』の種子は凄まじいスピードでト
リスの額からこめかみ、頬、顎、首筋、服の中をうねって、手首、
指先まで達し、恐らく下半身にも紋様を走らせた。

「い……ひう、あ……うあああああああああああああああ
あああああ！」

跳ね上がって、びきびきと嫌な音が走り、トリスのまだ未完成な
身体に血管が浮き上がった。

「トリス……！」

身を振ってクロン王女が名を呼ぶ。

「馬鹿な……血の濃いトリエステ王ですら、十秒ともたなかったの
だぞ……」

冥府の君は確かに、『英雄の血を引く、皇族、王族、名だたる大
貴族』を対象に、『魔剣』の種子で選別をせよ、と言ったのだ。

英雄の血統に何の関係もない少年が、これほどまでに耐性を見せ
るなど、

はっとした。

スライマーン騎士団見習でありながら、王家と面識があり、親し
くしていた様子だが、つまり、

「ご落胤か」

クロン王女が泣き濡れた顔を、きつと上げた。

「黙れ！」

「黙るも黙らんもあるか。トリエステ国王が外に生ませた私生児だな。なるほど、これといってとりえもなさそうなガキを取り立てるわけだ」

「く、う……」

「安心しろ。隠したいのなら、ここに聞いている者は俺たちだけで、本人は今何も聴こえず見えずつた『魔剣』と攻防を繰り広げておるだけだ。しかして、無事生還するかどうかは分からんが」

「悪魔め……」

「悪魔ではない。魔術師だというに」

そして、トリスの変態も終わった。

身体中に浮き出た紋様は掻き消え、ぐったりと床に倒れている。

「死んだのか？ いや……」

何と、適合者であつたらしい。世界中の人口分の一の確率なのに、見事三人で引き当ててしまった。

「なるほど、これが『英雄』の資質か……」

要するに、英雄とは、運を引き寄せる者なのだろう。運とは、つまり運命を司る三女神の寵愛を受ける、ということである。これは神々の代理戦争なのだから、いかに神々の寵愛をものにするかが、最初の難関なのだ。少なくとも、一人の女神はこちらについているようだ。

かすり傷一つ負わず、王の間までたどり着いたこと、たった三人

の犠牲で『英雄』として見出されたこと、それが『英雄』なのだ。

「しかし、弱ったな……俺はこいつを今から育成しなければならんのか……相当に嫌われたぞ」

珍しく本気で落ち込んで、アズールは小さく呟いた。

暗黒の国エレボスに彼を送り込まねばならないのだが、今のままでは見事返り討ちにあうだろう。

どうやって鍛えたものか。

「とりあえず、こいつは命をかけて約束を守った。今日のところは引き上げよう」

アズールは右手を上げた。召集の合図である。

「俺の可愛い紳士がた、王女を放してやれ」

不浄の血と精液から生じた怨霊たちがぼろぼろと崩れ落ちて溶け消えた。執拗に存在しようとする怨霊はどこにでも浮遊しているの、粘土のようにくつつけてこねて即席使役奴隷に出来るのである。ただし呪われた術なので、秩序ある神々を奉じる聖職者たちには、異端の烙印を押されることになる。無論、アズールに罪の意識は欠片もない。あれば使わない。

王女たちは手首を戒めていた影の大男が消滅した為、崩れ落ちる。それでもクロン王女は気丈に面を上げた。

「父母の敵。青蓮華の魔術師よ、約束を護ったことには礼を言おう。しかし、私はそなたを決して許さない。今日この日陛下を護らんとして尊い命を捧げた全ての兵たちに誓う。そなたを冥府の深奥に追い遣り、地獄の劫火にくべんことを！ 私はクロン・スライマーン・

トリエステの名にかけて、この誓いを必ず成就させるだろう！」

激しく憎悪と憤怒に燃える瞳に、アズールは敬意を払うことにした。

典雅な会釈をして、ぱちんと指を鳴らした。

「私は青蓮華の魔術師。赤蓮華ほど焦熱に通じたわけではないが、高貴な王女と勇氣ある影の王子に敬意を表して、『煙を上げない』純粋な浄化の炎を贈りましょう。我々がもたらした穢れを払い、土で創られた死者に、血ではなく炎を身体を循環させる眷属が、聖なる炎を奉じましょう」

「要らぬ！ と言いたいところだが、そなたの言葉を信じましょう。比類なき魔力を持った青蓮華の魔術師よ、どうかそなたがかつて我が国に恵みをもたらしたというその甚大な力でもって、我が父母、我が国民を安らぎの冥府へ送ってたもれ」

王女は凜として、視線を反らさなかった。アズールは心から感服した。この王女に憎まれ、追われることになるのは、辛いが役得である。

「真の炎、聖霊よ、先に訪れる災厄と恐慌から死者の目蓋を閉ざし、天の国に昇るように」

王宮では、死者とアズールたちの痕跡だけを青々とした炎に燃やし、他のものは一切火の気を帯びる事はなかった。それはほとんど一時の沈黙の間のことだった。一瞬にして浄化することは可能であったが、父母との別れの間を与えるよう、アズールの今更な心遣いでもあった。

「感謝する」

つ、と王女の頬を一筋の涙が流れた。

父母を殺した男に、敵ながらあっぱれ、とアズールはもう一度会釈して、大扉に向かって踵を返した。裳がさつと翻る。

「待つてよ、兄さん！」

去り際に、気を失っている今代『英雄』を見下ろした。
何と幼いことか。

破壊と渾沌の神々はすでに代理の『呪われし者』を見出し、暗黒の国エレボスでかの者が玉座で待っている。『呪われし者』は深い絶望が条件。聞くところによれば、その母御は皇后の讒言を受けて四肢を切断され、壺に入れられたまま半年生かされ続けたという。そして、その生んだ皇子もまた身体を切断された上、何年もの間幽閉生活を送っていたと

どれほどの絶望か。

どれほどの憎悪か。

それに追いつくまで、一体どれほど時間がかかるのだろうか。エレボスの天城は貪欲に猛スピードで成長し続ける。それは『呪われし者』の要塞であり、腹腔たる内臓である。止めることが出来ないほど肥大し切っては、対抗することが出来ない。

攻撃は、速ければ速いほどいい。時が経つほどこちらは不利になる。

しかし、あの少年で勝てるのか。

『魔剣』の力はどれほどのものだろうか。

王宮を出て、中庭の青空の下に出た。空中を劣等竜たちが飛来している。本来日の下では皮膚を焼かれ、爛れ落ちるよりない死者のアズールは、冥府の守護を受けて眩しさに両目を細めただけだった。冥府の約定を破れば、直ちに腐れ落ちる身体なのである。

『英雄』が『呪われし者』を倒す。

何度もあつたこれまでの構図だ。

今回も、勝利をもぎとらなければならぬ。

でなければ、神々の代理戦争は最悪の終幕を迎え、全てが『滅び』の前に『原初の渾沌』へ還るだろう。せめてこの人間の身で、黒竜族に貢献出来るとすれば、今代『英雄』の育成しかない。

「ハデイド！」

一等体躯の逞しい優美な黒い劣等竜を呼び寄せ、三人はその背に乗って宙高く舞い上がった。風圧にはたばたと裳がはためく。

「幼い『英雄』よ、また会うこともあるだろう！」

トリエステ王宮は青い燐に縁取られ、それは人も物も燃やすことなく、三日三晩死者を弔うよう輝き続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4187u/>

冥府より、英雄

2011年6月29日06時30分発行